

氏名	川合康三
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第390号
学位授与の日付	平成12年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	中国自伝文学研究

論文調査委員 (主査) 教授 興膳 宏 教授 礪波 護 教授 中務 哲郎

論文内容の要旨

autobiography ということばが一八〇〇年前後に生まれたといわれるように、「自伝」は西欧近代の生み出した概念の一つであった。そうした近代的自伝は中国においては二〇世紀に入って胡適らが提唱し盛んに書き出してから浸透していくものであって、それ以前の中国に存在しなかったことはいうまでもない。しかし自分で自分の人生、或いはまた自分という人間について書くという言述は、古くから中国にも存在したのであり、そこにどのような自己認識、自己表現のありかたをうかがうことができるか、本論は漢から清末までの展開をたどってみた。

自分を語る表現様式としては、唐代までに幾つかのかたちが生まれ、ほとんどそのまま固定されて以後に踏襲されていくが、それはほぼ以下の五つにまとめることができる。

第一は書物の序として書かれた文のなかに、執筆の経緯を記しながら自伝的記述を含むものである。現存する最も早いそれは、司馬遷『史記』の序にあたる「太史公自序」であり、祖先の記述から自分の誕生、幼少年期の事柄、現在に至るまでの履歴が記されている。こうした新しい言述が司馬遷から始まったことは、彼が李陵の禍によって体制ないし共同体のなから自分一人が排除されたという切実な体験によって、自分という人間と周囲の人々との差異を鋭く意識したことが与っていたらう。早期の書物の序としての自伝は、このように衆多と自分との違いに対する知覚から生まれているものが多い。後漢・王充『論衡』自紀篇では王充が幼い頃から周りに対していかに違和感を覚えたかを綴り、魏・曹丕『典論』自序篇では曹丕が文武いずれにおいてもいかに卓越していたかを誇らかに語り、そして東晋・葛洪『抱朴子』自叙は自分がいかに劣った人間であるかを執拗に書く。どのように違っているかはそれぞれに異なりながらも、衆多との差異を知覚することによって自分という人間が浮き出されてくるのである。西欧の自伝では古くはアウグスティヌスの『告白録』が俗界にあった自分から聖職者となった自分への変化を語っているように、自分という人間の時間軸上における変化を語ることが基本的な性格であった。アウグスティヌスにおける俗から聖へという変化は、近代的自伝に至ると、ルソーの『告白録』のように個としての自分が形成されるに至る内面的な過程をたどるもの、或いはまたフランクリンの『自伝』のように社会的な成功者となるに至る過程を語るものになるが、いずれも時間とともに変容していく自分を書くのが自伝であった。それに対して中国の自伝的言述では、自分という人間は終始して変化することはなく、水平の広がりの中かで周囲の人々との違いによって自分という存在を知覚するというのが基本的な性格となっている。そのために西欧の自伝が自己省察の記録とすれば、中国の自伝は自己弁明、自己釈明に傾くという性格が強い。このような彼我の差異はすでに早い時期の書物の序として書かれた自伝から見られるものである。

第二は陶淵明の「五柳先生伝」に始まる、隠逸者の暮らしぶり、生き方を書くものである。「五柳先生伝」は突然出現したように見えるが、「太史公自序」のような自分の実際の記録、阮籍「大人先生伝」のような自分の生き方を架空の人物に託して主張する伝、嵇康の高士伝のような実在した理想的人物の伝、そうした先行する人物伝の要素が一つに溶け合って生まれたもので、或る程度事実を反映しながら、理想とする生き方を虚構であるかに装って書くものである。この型の自伝は王績「五斗先生伝」、白居易「醉吟先生伝」、陸龜蒙「甫里先生伝」、歐陽脩「六一居士伝」と踏襲されていくが、作者は登場人物ではないかのように装う工夫はしだいに薄れ、自分自身のこととして書かれるようになっていく。とはいえ、これは実際の

人生の記録というより、自分の希求する生き方を書くものである。

第三は自撰墓誌銘の系譜である。この類の嚆矢となったのも陶淵明の「自祭文」である。生の歓びを文学の主題とした陶淵明は、それと表裏をなして死への恐れもしばしば唱い、死後の自分を想像するという特異な想像力から生まれたのが「自祭文」及び一連の「擬挽歌辞」である。「五柳先生伝」型自伝の系譜に連なる王績、白居易がこのジャンルにおいても「自撰墓誌銘」、「醉吟先生墓誌銘」をのこしていることは興味深い。中唐には自撰墓誌銘がかなり増えるが、おおむねは死を従容として受け入れる諦観を述べるものである。それに対して晩唐・杜牧の「自撰墓誌銘」は死の恐怖を赤裸々に語るもので、伝奇のような内容を備えている。

第四は詩による自伝である。庾信の「哀江南賦」、顔之推の「観我生賦」など、自分の人生の転変を王朝の興亡と重ねて唱い、そこから生じる哀痛の思いを述べた賦がすでにあるが、自伝詩の形成は杜甫を契機とする。そこには才気溢れる少年がしだいに老残の身になりはてるに至る人生が語られ、中国の自伝的言述としては珍しく、自分自身の変化が捉えられている。杜甫を承けて、中唐では韓愈、白居易など長編の自伝的な詩をのこしている。

第五は表題に「自伝」と名付けられたもので、「自伝」ということばは八〇〇年前後の二つの作品、陸羽の「陸文学自伝」、劉禹錫の「子劉子自伝」に初めて見える。「自伝」の語がこの二篇によって登場することと、その二篇が従来の自伝的言述とは異質な自伝となっていることは無縁でない。陸羽の場合は捨て子として出生した自分が寺で育てられ、そこを脱走して音楽師の集団に加わり、やがて認められて士大夫の列に加わるまでの過程を描き、劉禹錫の場合は若くして王伾・王叔文集団に加担したために官人としての決定的な挫折を味わった生涯を振り返る。前者は士大夫に成り上がり、後者は官界から追放されるというように、方向は逆であるが、両者に共通しているのはいずれも士大夫集団から排除された存在であったということだ。士大夫への帰属性を回復するために彼らは「自伝」を書かざるを得なかった。

唐代までに用意された以上の五つの型はその後踏襲されていき、自分のことを書く基本的な体裁として続いていくが、しかし同じ型を引き継ぎながらも、それぞれの時代の変化は反映されている。五代・馮道の「長楽老自叙」は「五柳先生伝」型自伝の系譜に属し、より直接には白居易「醉吟先生伝」を承けている。白居易はおそらく当時最も広く受け入れられていた文学であったのである。自分の来し方を振り返りながら、老年の自分の満ち足りた暮らし、その自足、満足の思いを述べるところが「醉吟先生伝」に連なっているのだが、「醉吟先生伝」の自足の感情は、世俗的価値観に対峙する、それとは異なる価値観に生きる隠逸者の生から生まれていたのに対して、馮道の満足はそこに列挙されているように歴代王朝のいずれにおいても高い官位を得たことから生じる自足の情に満たされているのである。老年の自足に満たされた思いは引き継ぎながらも、自足を覚える対象が逆転しているのである。

宋初の王禹偁は三百十六句に及ぶ長い自伝的な詩をのこしている。彼の官歴における最初の挫折に際して、それまでの人生を回顧したものである。かくも多くの言葉を費やしながらか、そこに繰り広げられているのは定型的な表現によって描かれた型どおりの士大夫像であって、王禹偁独自の人間性、自分に即した個々の事実は書かれていない。他の資料から王禹偁は農民の子供であった時に着目されて勉学を授けられ官人になったことがわかるが、そうした特異な経歴も語っていない。個を個として認識し表現するのではなく、観念としての士大夫像の型に自分をあてはめて書いているのである。そこに宋初における模範的士大夫のモデルがいかなるものであったかを見ることができる。左遷された時期にこうした自伝詩をものしていることは、自伝的言述が士大夫としてのアイデンティティーの危機に面した際、その帰属をみずから確認することを求めて書かれることを示している。

やはり宋初の柳開は二篇の「五柳先生伝」型自伝をのこしているが、それはすでに陶淵明のように隠逸生活の喜びを述べるものではなく、士大夫としての規範に合致する人物を描くものである。二篇とも応試を前にして呈された作品であることが、その自伝の性格を決めている。

李清照の「金石録後序」は近代以前の中国の自伝的言述のなかではなほ特異なものである。規範的士大夫を描くにせよ、隠逸者を描くにせよ、士大夫の理念、士大夫の生き方という典範からはずれることがなかった中国の自伝が、作者の李清照が女性であることによって初めてそれから離れ、規範に囚われない生身の人間を語る自伝が出現しているのである。古物の収集と喪失の過程を語るそれは、物に執着する人間の情念のすさまじさをまざまざと描き出している。それを通して普遍的な人間の姿が浮かびあがってくるのである。

「金石録後序」は北宋から南宋へ移る動乱の時代に翻弄された一市井人の人生を語るものであったが、文天祥の場合は南宋

が元によって滅ぼされる、やはり国家存亡の機に際して、宋王朝の命運を一身に背負って事に当たった人間の記録である。度重なる危機に見舞われる波瀾万丈の行跡が逐一記録され、文天祥はほとんど記録を書くことだけを支えに生きながらえたかのようなようだ。そこには忠臣のあるべき姿を極限まで実践した一人の人間の姿が浮き出される。史実との噛み合わせはともかくとして、文天祥や彼の事跡を伝える人々は、そのような人間像を作り出している。そこには士大夫としての生き方の極致が描き出されている。

元末明初を生きた楊維禎と宋濂は互いに認め合った文学者であるが、二人の自伝は対照的な様相を呈している。楊維禎の「鉄笛道人自伝」は従来の「五柳先生伝」型自伝に連なる様式を襲っているが、すでにそこには隠逸者の生き方を語るというより、自分個人の好み、審美観を前面に押し出した文人の生き方が描かれている。隠逸の楽しみが文人の美的追求へすり替わっていく過程がそこにはうかがわれる。一方、宋濂の「白牛生伝」はこれもかたちとしては隠逸者の生を語る型の自伝に沿うものでありながら、書かれているのは儒家の典範をそのまま当てはめた規範通りのものでしかない。両者の違いには、明代に多様に展開していく文人の早い例である楊維禎、明初に国家の体制を整えるのに貢献した宋濂、その二人の生来の資質の差異、さらにはともに家居の時期の作とはいえ、すでに官を退いていた楊維禎とその後用いられることになる宋濂という、それぞれの人生において製作時期のもつ意味の違いも関与しているだろう。

自伝をのこしている作者は官界であれ学術や文学の領域であれ、後世に名をのこすような人物であることが多いが、明・文元発「清涼居士自序」はこの自伝以外にはまるで無名の、ごくふつうの人物の一生を自ら語った自伝である。相当に長い作品ではあるが、そこに描き出された人物像はこれも儒家の規範をなぞったような、個性に乏しいものとなっている。士大夫の観念がいかに強い拘束となって自己認識・自己表現を規制していたかを物語る。隠逸者の生き方をいう形式を取っているが、実際には官人としての落伍者の記録を隠士の生というかたちで捉えたものである。

奇矯な文人として知られる明末・張岱の「自為墓誌銘」に至ると、それまでの長い期間にわたって士大夫の世界を秩序づけていた価値の体系に動揺がもたらされる。自分の人生が前半と後半とで両極を成すほど、大きな落差を体験したことから、様々な範疇における価値と反価値の二項対立の無化、既存の価値体系の錯乱が、その人生と重ね合わせて語られている。人生を二つに分ける契機となったのは明王朝の崩壊であり、国家の崩壊と自分個人の「転落」とを重ねて捉えるところには伝統的士大夫の精神がのこっているものの、士大夫を成り立たせてきた価値観、士大夫を支えてきた規範、そうした従来の秩序はここに至って安定を失うのである。

規範に合わせて一定した自己の姿を描いてきた中国の自伝もこのように変貌してくるが、清末・梁啓超「三十自述」では、自分の変化する様相そのものが叙述の対象となる。八股文の学習から阮元の学海堂、さらに康有為の万木草堂、そして日本に渡来してからの「思想一変」、梁啓超は次々と新しい学問に触れ、そのたびに自分が変貌するのを記録しようとする。固定的な士大夫の生と人間を描いてきた中国の自伝も、近代に面したこの時期に至ると、自分自身の変化を書くものとなったのである。

論文審査の結果の要旨

十九世紀になって出現したとされる autobiography ということばは、中国語で「自伝」と訳される。ただし、autobiography の概念にそのまま相当する自伝は、中国にはそれまでなかったといわれる。二十世紀に入って、胡適の「四十自述」を嚆矢とする自伝の執筆が盛行するようになり、それは一つの新しい現象として注目を集めたが、長い中国文化の伝統の中で、「自伝」はほんとうになかったのか。それが、本論文における論者の問題意識の出発点になっている。

論者はこの課題に長年取り組んで、その最初の成果を『中国の自伝文学』（1996年、創文社）として公刊した。そこには、西洋の場合とは異なりつつも、確かに中国的な特色を備えた自伝の存在が、古代から唐末にわたって詳細に報告されている。この書は単なる自伝研究にとどまらず、同時に中国における自己認識・自己表現のありかたをめぐる省察の成果として、内外の学界でかなりの反響を呼んだ。この書の中国語版（1999年、中央編訳出版社）がいち早く出されたことも、中国での評価の高さの例証といえる。本論文は、この成果をふまえながら、考察の対象をさらに唐以後の五代・宋から清末に至るまでの長い時期に拡張して、中国の自伝文学の展開を通時的にたどっている。ここで留意すべきは、本論文の題名が「自伝研究」ではなく、「自伝文学研究」となっていることである。論者の意識では、あくまで文学としての自伝が対象とされているのである。

「自伝」を、仮に「自分を語る表現様式」と定義すれば、中国では漢から唐に至るまでの間にそのいくつかのタイプが現われて、それがほぼそのまま後の時代に踏襲されてゆくという経過をたどっている。論者によれば、それは以下のような五種の類型にまとめられる。

第一には、書物の序として書かれた文の中に自伝的な記述を含むものであり、前漢の司馬遷『史記』の「太史公自序」に始まり、後漢の王充『論衡』の「自紀篇」、魏の曹丕『典論』の「自序篇」等へと継承されてゆく系列である。これは中国の自伝のうちにあつては、西洋の自伝に最も近い性格を備えている。ただ、そこに描かれる自分は、時間の経過の中で変化することがなく、衆多との差違を知覚することによって捉えられた自画像であるという共通の特色がある。これらの自伝には、自己弁明、自己釈明的な要素が強い。これはアウグスティヌスの『告白録』や、ルソーの『告白』のような西洋の自伝が、時間とともに変容してゆく自分の姿を描いているのと全く異なった自伝の形を示している。

第二は、五世紀の陶淵明「五柳先生伝」に始まる、架空の人物に仮託した自伝である。これは論者によれば、阮籍「大人先生伝」のような自分の理想的な生き方を架空の人物に託した伝や、『高士伝』のような理想的な生き方をした実在の人物の伝など、先行する人物伝の要素が溶け合って生まれたものである。フランスの自伝文学研究者フィリップ・ルジュンヌの説く自伝の定義によると、作者と話者と主要人物は同一人であることが作品中に明示されていなければならないが、「五柳先生伝」では、「先生はいずこの人なるかを知らざるなり。またその姓と字とを詳らかにせず」と、冒頭からその定義を裏切るような記述が見える。ここに展開されるのは、陶淵明についての事実ではなく、「かくありたい」という作者自身の生の願望である。だが、その内容は陶淵明の「実録」として評価されたと史書には見えており、ある意味で最も中国的な自伝といつてよい。このタイプの自伝は、唐の王績の「五斗先生伝」、白居易の「醉吟先生伝」、宋の歐陽脩の「六一居士伝」など、連綿と踏襲されてゆくが、登場人物と作者との距離は後の時代になるほど縮まってくる。

第三は、作者が自分の死を想定して書く「自撰墓誌銘」である。この系譜の自伝の源流は、やはり陶淵明の「自祭文」にある。「自祭文」は、いわば「かくあるであろう死」を想像して、自分の生きた過去を回想した内容になっている。陶淵明は、この「自祭文」や「擬挽歌辞」において、自分を努めて客観視しながら、生の喜びと背中合わせにある死への恐れを告白しており、それがこれらの作品に特異な魅力をもたらしている。「五柳先生伝」型の自伝を書いた王績・白居易がやはり自撰墓誌銘を書いているのは興味深い。そのほかにも多くの追随者を出している。そのおおむねは、陶淵明とちがって、死を従容として受け入れる達観を述べるものだが、論者は晩唐の杜牧の「自撰墓誌銘」が死への恐怖を赤裸々に語るような作品に、より多く文学としての共感を覚えている。

第四は、詩あるいは広義の詩である「賦」という韻文形式による自伝である。この系列の自伝には、すでに六朝期の庾信「哀江南賦」や顔之推「観我生賦」などがあるが、ことに唐の杜甫の一連の自伝的な作品はその頂点に立つものであり、自伝としては珍しく自分自身の変化が語られている。中唐の韓愈や白居易がその流れを継ぎ、宋においても、王禹偁の三百十六句にも及ぶ長篇の自伝詩のあることが紹介されているが、その詩は作者の大きな挫折経験を契機として書かれていて、いわば士大夫としてのアイデンティティを確認する意味がそこにこめられている、と論者はいう。傾聴すべき指摘であり、この傾向は次の第五の自伝にも共有されるところがある。

第五は、表題に「自伝」の名を有する作品である。このことばが作品の題名にはじめて現われるのは、中唐の陸羽「陸文学自伝」と劉禹錫「子劉子自伝」である。二つの自伝に共通するのは、陸羽が捨て子という出生によって、劉禹錫が政治犯としての辺境の地への追放によって、ともに士大夫集団から排除されるという深刻な体験を経て書かれたことである。彼らはいずれも奪われた自己を回復するために自伝を書かざるをえなかったのだ、と論者は見ている。同時にこれらの自伝は、過去のそれに比べて、一段と複雑で奥行きのあるものになっており、論者はこれを中唐という文学・文化から人間の精神全体にわたる大きな変革期がもたらした産物と考えている。中唐文学の研究に長くたずさわってきた論者ならではの見識がそこに窺われる。

こうした検討を通じて、本論文では主としてその前半部において、中国独自の自伝のありかたが周到に体系づけられており、その論証はきわめて説得力に富む。唐代までの自伝作品は決して多いとはいえないが、論者は広く資料を渉猟して、丹念にいくつかの基本となる「点」を探し出しながら、複数の「点」をつないで「線」とし、さらにそれらを合わせて「面」にまで広げる努力を根気よく続けている。ところで、宋以降になると、自伝資料の数量は飛躍的に増え、そのため唐までとはむしろ逆に、数ある自伝の中から新しい要素を含む作品をいかにして発見するかが重要な課題となる。かくて本論文の後

半部は、一転して砂を篩って金を選ぶような作業の成果になっている。

唐までに用意された五つの型の自伝は、基本的にそれ以後の時代にも踏襲されてゆくが、時としてステレオタイプを破るような清新な作品も現われた。その代表的な一つが、宋の李清照による「金石録後序」である。それまで士大夫の理念や生き方から離れることのできなかつた中国の自伝が、作者が女性であることによってはじめて旧套な破られ、古物の収集と喪失の過程を通して、規範に囚われない生身の人間像が生き生きと形象されている。論者はそこに、「物に執着する人間の情念のすさまじさ」さえ認めている。また、明末の張岱の「自為墓誌銘」に、士大夫を支えてきた規範や秩序の崩壊してゆくさまを認めるのも、的確な指摘である。本論文の最後に取り上げられた清末の梁啓超の「三十自述」では、従来の自伝にはなかつた変化してゆく自分の姿が描かれていることが注意されており、近代の自伝を予告するような作者の自己発見はひととき印象的である。

前半部に比べて、後半部の記述がややまとまりを欠く恨みがあり、引用される自伝の訳文にも時折ミスが認められるが、古代から近代に至るまでの中国の自伝文学の流れに大きな見通しをつけた功績は、それらの小さな欠陥を覆って余りあるものといえる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年3月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。